



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・09・7月号

種をまきましょう

先月のことになります。愛隣を卒業した男の子のお母さんと話す機会がありました。久しぶりだったので、世間話などに花が咲きました。暫くしてお母さんがこんな話をしてくれました。「先生、嬉しいことがあったのよ。この前うちの息子がね、ニュースを見ながら言ってたのよ。その時は外国の民族紛争のニュースが流れてたんだけど、“お母さん、やっぱりぼくは戦争はよくないと思うよ。人と人が殺しあうのはだめなんだよ。神様がそれはいけないことだって。ぼくね、神様はいると思う。そのことは信じられるんだ。”うちは特にキリスト教ってわけじゃないから、やっぱり幼稚園の時に聞いた事が彼の中にしっかりあるんだと思う。こんなふうに見えるようになるなんて、嬉しい！」と。それを聞いた私は、もっと嬉しい気持ちになりました。幼稚園時代の彼は、やんちゃで甘えん坊、ちょっと幼い感じもありましたが、とても優しい気持ちの持ち主で、絵本やお話が好きでした。そういえば礼拝のお話はとても真剣に夢中になって聞いていました。あの時きつと、小さな一粒の種が彼の心の畑に蒔かれたのでしょうか。

私は幼い頃に繰り返し繰り返し、戦争の話が聞かされました。祖父母は勿論、父や母も戦争経験者でしたから、その話は実にリアルです。子どもにとって心躍る楽しい話ではありません。苦しくて怖くて寂しい、そして何かに対するやりきれない怒りのような感情をいただきました。漠然としかしはつきりと、戦争は二度と繰り返してはいけないという思いが心に刻まれました。物事を考えるときの、大事な判断の基準がその時に形成されたように思います。

さて、今、私たちは子ども達に何を語っているのでしょうか？世界のどこかで今日も紛争は起こっています。しかし、私を含めて子育て真っ最中のここ日本の親たちは、特別な経験がない限りそのほとんどがリアルな戦争体験者ではありません。それは何にも代えがたい幸せです。ですが、ちょっと昔の親たちのように、繰り返し戦争の悲惨さを語り、この平和がどれほどかけがえのないものかを語ったりはしていません。体験者ではないし、ここではそのこと(世界中が平和でない事)をあえて直視せずには幸せに暮らすことが可能だからです。(実は見ない事にしているだけなのですが・・・)

それは何を意味するのでしょうか？見ない事にして、ここにだけある平和を享受し、その貴さを伝えないということ。今もどこかで戦火の中にある親子がいることに思いを馳せないでいられるということ。それは即ち、私たちが大事な種まきを怠っているという事にはならないでしょうか？将来、ある日突然、平和な生活を失うようなことが起こって初めて、その貴さに気付くということはあってはならないことです。「平和」「平等」「隣人を愛する」等々、幼い子ども達の生活からは少しかけ離れたことのようにです。でも、一粒の小さな種の蒔き時は、この幼い時にこそあるのだと思います。